

隨泉寺寺報

2004年 2月号 第402号 082-892-0217

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

仏婦講座

講師 教善寺住職 粟津慈眼師

講題 「何がありがたいのか？」

山里は 冬ぞさびしさ まさりける

人めも草も かれぬと思へば 源宗于朝臣

2月は一年で一番寒い月です。上記の歌は、なんとともあ、寂しい風景の歌です。寒々として、人の気配が感じられなくて、ひっそりと静まり返った景色が思えます。が、その中にも人や草木の息遣いが確かに感じられます。枯れてしまった草の根元、土の中では春を目指して新芽を伸ばしているでしょう。訪れる人もなく扉が固く閉じられた家の中では、寒さを凌ぐために囲炉裏に火が入っているでしょう。

かぎるらん 命いつとも 知らずかし

あはれいつまで 君をしのばん 和泉式部

仏婦会員の追悼法要があります。懐かしい人をしのんでどうぞお参り下さい。大切な人をなくされた方にとっていつまでも忘れられることではないでしょう。悲しみの向こうにきっと明るい春が待っていることを期待しましょう。

2月の法座予定

2月14日昼席午後1時より……仏婦講座

2月14日夜席午後7時半より……出張法座 井原集会所

2月15日朝席午前10時より……仏婦会員追悼法要 おとき

2月15日昼席午後1時より……仏婦講座

3月 2日午後6時より……本部役員会



福は内、鬼は外

2月3日は節分です。【福はうち、鬼は外】と豆を投げて福を招きます。幸せは来てほしいし、不幸は逃げ出してもらいたい。誰でも思う自然な感情です。1月の10日に西宮神社で、今年の恵比寿大祭の福男を決める行事がありました。毎年2000人を超える人が押し寄せて、今年一番の福男になりたいと行列をします。今年一番乗りをして福男になった人は、大阪の消防署に勤める人でした。去年も本殿の入り口までは一番でしたが、あと10メートルのところまで転んで、残念ながら3番手でした。おそらく今年こそはということで、3日も4日も前から並んで待ったのでしょう。ぶっちぎりの一等賞でした。このニュースはNHKをはじめ各局のテレビでも放映され、去年の転んだ場面まで放送されました。まさしく今年一番の福男です。嬉しそうに笑っておられる顔が何度も映りました。しかし一夜明けると事態は一変します。それは門が開いて走り出したとき、おそらく友人とみられる方が手を広げて他の人が走るのを妨害していたからです。それを視た人の抗議の電話やメールが神社や消防署に殺到しました。結局、彼は次の日に福男を返上しました。福と凶は並んであるのかもしれませんが。



『大般涅槃經』にこんな話が載っています。ある老夫婦が住む一軒家があった。ある日、娘が訪ねてきた。その娘は、「一夜の宿を貸して下さい」と頼むと、おじいさんは、「この付近では見かけないお方じゃが、あなたはどのようなお方ですか」と尋ねる。娘は「私は旅をしているもので、福の神でございます」と答えた。すると、おじいさんは、大変喜び、手厚くもてなした。ややしばらくして、また戸口にだれか立っていた。「だれだろう…」と出てみると、娘が立っていた。「だれだね？ 何の用かね！」と尋ねると「私は貧乏神でございます。今晚一晩泊めていただきたいのですが…」と、その娘はお願いをしたのである。「貧乏神なんぞ真っ平ごめんだよ。どうかすぐにでも立ち去っておくれ」と言った。すると娘は去り際に「さっきからお邪魔している娘は、私の姉でございます。私たちは、いつでも二人で一緒に旅をしております。私を追い出されますと娘（姉）も出ていきますよ」と言い残して去った。

案の定、福の神も、いつの間にか姿を消してしまった。

御礼

永代経懇志（先月水川様のお名前を間違えていました。お詫びして訂正します。）
拾五萬円 水川 準二殿 故 水川 新一様 特別永代経志として
拾五萬円 延 義則殿 故 延 弘様 特別永代経志として

亡き父の一周忌を迎えて

植木 功

昨年1月に父が風邪をこじらせ入院して、それから1ヶ月後に91歳の天寿を全うして、早1年が経ちます。父が亡くなった葬儀の日は雪が降り続く寒い一日で、父の波乱万丈の人生を象徴したような日であった。

明治生まれの父は戦前に旧満州へ家族で渡り、終戦後に日本へ引き揚げた苦勞な人生を歩んだ人だった。その後は母と40年近く共稼ぎをしながら、私たち兄弟3人を育て上げてくれたことに感謝しています。父の晩年のころは入退院の繰り返しでしたが、88歳の時の胸の手術を乗り越えた時は、生きることへの執念を持ち続けて、私たちに命の大切さと尊さを教えてくれました。一つだけ残念なのは、人生を共に苦勞して歩んだ母への感謝の言葉を、父の口から聞いた記憶がなかったことが悔やまれます。

しかし、亡くなってから後で父の手紙などを整理中に、なんと母への感謝の念が書き綴られていた父の人生史が見つかり、明治生まれ特有の気骨ちょうさであったことが想い偲ばれます。

私たち兄弟3人が生まれ育った中野には、自然との触れ合いが未だに数多くあり、私が幼いころから父に自然界での遊び方や、人間として生きて行くための数々のことを父から教わったと思います。

思い返せば、父とは幼い時からの瀬野川で魚取りや、野山でのキノコ取りなど楽しかった思い出があります。また家事手伝いなどを通して、数多くの自然と触れ合う中で自らの力で色々な楽しい希望を持ち、創意

工夫をして、それを達成した時の感動など、遊びや家庭などを通して人間としての基礎を教わったと思います。そして人間として我慢をすることの大切さを教わったことが、私の人生訓となっていると思います。昨今はストレスの多い社会の中で、子供達が精神的にキレたりして社会問題にもなっていますが、たやすく手に入れる事ができる世で、プラスの3Kと言う仏教言葉があるように、常に周りのせいにせず、子供達には希望や勇気・感動などの場面を与えていく事が、われわれ親としての役目ではないのだろうか、と思います。そして、これからも家族・兄弟や母達と仲良く暮らしていくことが、亡き父への恩返しと考えています。

最後に生前、父が大変お世話になった皆様方に対して、心より感謝の念を持ってお礼申し上げます。

春夏秋冬 いつもありがとう

カレンダー2月号 東井 義雄

私は、小さいノートを持ち歩いておりまして、よろこびが見つかると、それを書きとめておくように努めているのですが、うっかりしていると見すごしてしまいそうな小さく見えるよろこびが、みんな、すばらしい大きいしあわせにつながっていることに、気づかせていただくのです。

若い頃にはうっかりしていたことの中に、こんな大切なしあわせがあったということに驚くとともに、こういうしあわせにであわせていただけるのは、年とったおかげさまかなと、よろこばせていただくのです。

きゅうりのつけものが 満点の味をひっさげて
わたしのために
かぼちゃも 茄子も 長豆も
それぞれが それぞれの最高の味をひっさげて
わたしのために
わたしのたるんだ胃袋に目を覚まさせるために
さんしょも 食卓に
梅ぼしもその横に
もったいなすぎる
もったいなすぎる
せめて わたしも
きゅうりの漬物の
ひときれにでもなって
どなたかの胸に
よろこびの灯をともしたい
さんしょの一粒にでもなって
生きがいを失っている人に
生きがいの
目を覚まさせてあげたい
思いあがるなど
叱られてしまいそうな気もするが.....。

